

松村通信第 167号

5月26日

松村勝弘

ケア

近況・脳梗塞発症

入院中再読した白石正明『ケアと編集』（岩波新書、2025年）は、入院前に読んだときは違ってケアされる側にたって深読みできました。経営学的なインプリケーションは別の機会に述べたいと思います。

2025年11月25日早朝脳梗塞を発症。病院に救急搬送されてから長い入院生活が始まりました。最初は生死のあいだをさまよいましたが、ひと月たって症状がおちついたところで12月25日にリハビリテーション病院に転院、その後4ヵ月リハビリに励み、やっとつかまり立ちできるようになったので2026年4月20日に退院しました。脳梗塞といっても小脳の梗塞で体のバランスがとれず、自由が利きません。とくに左手・左足の自由がきかず室内でも車いす生活です。だから退院しても体の不自由はかわらず家内の支えに頼っています。いわゆる老老介護です。病院と違って、つつい甘えがでて、言い争いが絶えません。

ケアとは

ケア 今回は簡単な内容紹介とコメントに留めます。I章は「いかにして編集の先生に出会ったか」と題して色々書いてありますが、著者が医療系の出版社でケア系の出版物にかかわったときに感じたことを書いています。そして、ケアと編集は似ているという。「1 ケアとは」でケアについての基本的なスタンス、理解されにくさ、をつぎのように書いてます。

「一つはいまの世の中の基本的な価値観と逆のことをやっているからだ。自分の身は自分

で守るという『自立/自律志向』とか、最小のインプットで最大のアウトカムを得ようとする『効率志向』にまずは反している。それだけではない。この「志向」という言葉が前提にしていること、つまり『未来の目標のために現在を手段にする』という姿勢そのものから、ケアはかけ離れているからだ。」(4頁)という。ケアは効率重視ではなく、現在志向だというわけだ。

べてるの家 つぎに、「べてるの家」でのソーシャル・ケース・ワーカー向谷地生良さんとの出会いとそれらからの経験から2で「べてるの家との出会い」として北海道浦河町にある精神障害者の生活拠点「浦河べてるの家」での経験などから得られた知見が述べられている(10頁)。そこで福祉と医療との違いに気づかされる。すなわち、福祉と医療は近いようだが遠いという。「医療が扱う対象の多くは『肉体そのもの』だから、その肉体を持つ人(=患者)の性格の良し悪しも、貧富の格差も、どんな世界で暮らしてどんな生活をんでいるかも、その多くを『ノイズ』として無視してよい」(12頁)と、このようにいう。

依存=被支配 II章では、「ズレて離れて外」と題している。統合失調症小児科医で、生まれながらの脳性まひを持っていて四肢がそれほど動かない「熊谷さんは日常生活の多くを介助者に頼っている。しかし特定の介助者がどんなによい人であっても、その人だけに介助を頼るようなことはしない。必ず複数人に介助先を分散している。」(61頁) 特定の人に依存することはその人に支配されることになる。わたしでいえば、全面的に妻に依存し、支配されているわけだ。

ケアの現在性 Ⅲ章は「ケアは現在に奉仕する」と題する。その1で、「ケアと社交」と題して、評論家の山崎正和を引く。「さて山崎さんは、『社交は何かを為すための手段ではない』と力説している。ただ社交するために社交するのだと、さらに、続く文章を読んでびっくりしてしまった。そうした自己目的（社交のために社交する）に奉仕するために、各種の『礼儀作法』があるとさえ言うのだ。つまり作法とは、社交という時間を終わらせないように、あるいはできるだけ長く引き伸ばすために置かれた『人為的な障害』なのだ」と(93頁)つまり社交のために社交するわけだ。同じことはケアにもいえるという。4では「ナイチンゲールを真に受ける」と題して書かれている。ナイチンゲールに『病気は回復の一過程である』という不思議な言葉がある(118頁)という。こには私も勇気づけられた。

構成論 Ⅳ章は「ケアが発見する」と題され、その冒頭1で「原因に遡らない思考」と題して小見出し「因果論から構成論へ」でさらに「以前、向谷地さんと話しているとき、『今度、発達障害の構成論的研究をする』と聞いたことがあった。……原因を究明して解決策を探るといふ因果論的な発想では太刀打ちできない複雑系の領域に立ち向かうために生まれた研究手法、らしい。」(128頁)私も社会構成論に興味があるので紹介しておく。

受け Ⅴ章「『受け』の豊かさに向けて」では題して、「1 蘭の花のように愛でる」、で、ALS(筋萎縮性側索硬化症)という難病を発症した実母を介護した娘(川口さん)による、十二年の記録で、ある種「植物人間」を経て亡くなった母親が最後に見ていた、感じていた、であろう「風景」に「蘭の花のように大事に守られ、生を享受することに忙しかった人が発した声。〔母親の没後母親の寝ていたベッドに寝てみて〕母親と同じように仰向けになった川口さんの耳に届いたその言葉は、た

だ生きればいいんだとわたしたちを励ましてくれるように思う。」(185頁)

2では「受ける人」、と続けて川口有美子さんの『逝かない身体』¹⁾は、『編集』といった切り口から見てもヒントになることが多い本だった。」(185頁)「一般的に、何かを『なしうる』ということは個人に所属する能力であると考えられている。しかし同時に、『なしうる』ことが、他者から許されているという感覚もある。……自分ではコントロールできない何者かから、それを『なしうる』機会や力が与えられる。あるいは『やってくる』すべてを自己に備わった能力に由来させるのではなく、『何かを与えられた人』として自分というものを考(194頁)えることができるが、「ALSを生きるということは徹底的に受動的な体験だが、それは忙しかったりするのかもしれない。」(191頁)という。

「受動性と偶然性」でこうまとめられている。「川口有美子さんの『逝かない身体』¹⁾で描かれていたのは、一切の能動性を奪われた受動性の極致としてのALSのお母様と、そのお母様が生きている限り発する微弱な身体的サインを、これまた一方的に受け取る側に立たされた介護者たちの姿だった。そこから、何かを『なしうる』力は個人の中に能動性として宿るばかりでなく、ある種の『場』に受動的に宿るといふ話になった。」(205頁)

Ⅵ章「弱い編集——ケアの本ができるまで」において、ケアと編集の類似点について書かれている。

1) 川口有美子『逝かない身体——ALS的日常を生きる』医学書院、2009年。

HP, FBを見て下さい。又何でも意見を。
皆様のご意見を歓迎します。HP
(<http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/>) もご覧下さい。
フェイスブックもやってます。また、メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい
(matumura@mba.ritsumei.ac.jp)。